



「 One and Only Kiss 」
- 「接吻（くちづけ）の指輪」より -

GINKO

「 One and Only Kiss 」 - 「接吻の指輪」 より-



この物語は

韓国の俳優、イ・ビョンホンさんが日本語で歌った曲
「接吻（くちづけ）の指輪」の歌詞から感じた
インスピレーションを元にした物語です

楽天ブログ「きつね雑貨市 LBHcafe in 楽天」にて
8回連載したものを
加筆・修正してお届けします

文中、彼女が彼のことを「オッパ」と呼んでいます
通常、韓国では年上の彼氏を「オッパ」という呼称で呼ぶんですが
実の兄も「オッパ」と呼ぶので、紛らわしいんです^^
ドラマでは名前に置き換えてアテレコしますが
それでは雰囲気が出ないのでそのまま使っています

ちなみに、韓国の車は左ハンドルが基本で、右側通行です
登山やハイキングが盛んだそうです
そんな文化・習慣の違いも楽しみながら、
最後までおつきあいいただければ幸いです。

「婚約式の会場、俺が電話でキャンセルしといたよ」

「・・・えっ!？」

水曜の午後。

ソウルの清溪川 (チョンゲチョン)を見下ろすオープンカフェ。

パク・ソニはコーヒーカップを取り落としそうになった。

目の前のキム・ヨウォンは無作法な音のほうに驚いている様子で、

ソニの動揺にはさっぱり気づいていない。



「ど、どうして!？」

カップの取っ手にかけてたひとさし指が震える。

何気なく見えるよう、ストレートのロングヘアをかきあげた。

彼に嫌われるようなことをした覚えはない。

そもそも、それなら彼はこんな風に休日と一緒に過ごしたりはしないはず。

「脳腫瘍の患者の状態があまり良くなって、もう一度手術することになったんだ」

「手術!？」

「うん。重なっちゃって悪い。婚約式の日取りは改めて決めよう」

「ああ・・・ ええ・・・」

ヨウォンはそれほど申し訳なさそうでもなく、おもちゃを見る子供のような目で

眼下の清溪川 (チョンゲチョン)と街並みに視線を移した。

コロコロと軽やかな着信音が鳴った。

ヨウォンはスーツの胸ポケットから携帯を取り出し、ソニに合図して席を立つ。

「手術か・・・ なんだ、良かった」

ほっとして、自然と笑みがこぼれた。

戻ってきたヨウォンがソニの顔を覗き込み、片眉を上げて笑った。

ソニは笑いながら、何でもないと言った。

カフェを出ると、ヨウォンは清溪川（チョンゲチョン）に向かって歩き始めた。

「オッパ！？ 映画館はこっちよ？」

肩越しに振り向いたヨウォンの眉が少しハの字になっている。

それを見て、ソニはすぐに悟った。

「さっきの電話、病院から？」

「ああ。経過観察してる患者が熱を出したんだ」

「そう・・・早く良くなるといいわね」

歩きながら、ソニはお見合いの日のことを思い出した。

あらたまった装いで、少しぎこちない様子のふたり。

あの時は狎鷗亭（アックジョン）のシネコンでチケットを買ったところで携帯が鳴った。

ヨウォンの患者はいつ急変するかわからない。

ふたりがデートで映画を観たのは数えるほどだった。

気がつくやうに、ヨウォンはソニより5メートルほど先を歩いていた。

行き交う学生やサラリーマンが時折ふたりの間をさえぎる。

ソニは立ち止まり、ヨウォンの後姿を見つめた。

グレーのスーツが良く似合う。

ゆるい天然パーマでふんわりした髪。

おもむろにバッグからデジカメを取り出すと、ソニは雑踏に向かってシャッターを切った。
撮ったばかりの画像を確認する。

見知らぬ人がすました顔で歩いている。

友達と笑いあう女性。

何かを指差し、隣の人に話しかけている老人。

その中に、小さくヨウオンの後姿が映っている。

「ふふ・・・」

「ソニ!？」

はっとして顔を上げると、ヨウオンが通行人をよけながら歩いてくる場所だった。

ソニはとっさに別の画像に差し替えた。

「びっくりしたよ。後ろ見たらいないんだから」

「ごめんなさい」

「何? 写真?」

デジカメのモニタには笑顔のソニと、背の高い男性がピースをして映っていた。

「これ、誰?」

ヨウオンの顔が曇った。

ソニと男性は二人ともチェックのシャツにチノパン姿。

帽子をかぶり、リュックサックをしょっている。

「ふふ、私の新しい彼氏」

「彼氏!？」

ヨウオンが思いがけず大きな声をあげた。

ソニは思わず吹き出してしまった。

「やだ、オッパ、信じた? このコ、中学生よ!？」

「え?」

ソニの手からカメラを奪い取り、ヨウォンは穴が開くほど写真を見つめた。

「中学生って。こいつ、190くらいあるんじゃないか？」

「よく大学生に間違えられるんだって」

「本当に中学生？」

ヨウォンの不信げな表情にソニは笑いが止まらない。

「やだ、オッパったら。ほら、この、ソン・ミヌさんの息子さんよ。

先月のトレッキングに初めて参加したの」

ソニは次の写真を表示して見せた。

良く似た父子とソニが両手ピースで映っている。

次の写真は、トレッキング同好会のメンバーと山の頂上で食事をしている姿。

その次は全員で笑顔の記念写真。ふざけた表情のアップ。

よく見れば、まだどこかあどけなさが残っている。

「本当にまだ中学生だってば」

ヨウォンは目だけ動かして、モニタとソニを交互に見た。

ソニは肩をすくめ、オーバーにおどけて見せた。

「なんだ、そっか」

ヨウォンはソニにカメラを返し、安心した顔で何事もなかったかのように歩き出した。

ソニはあわてて追いかける。

予想外のあっさりした反応に、ソニは少しがっかりした。

ソウル南部の総合病院。

静かなフロアで手術着姿の男性が二人、ブラシで爪の間を洗っている。

「聞いたぞ？ 今日、本当は婚約式だったんだって？」

メガネカバーをつけたチャン・ジホが手元を見つめたままヨウォンに話しかけた。

「ああ、重なっちゃったから延期したんだ」

ジホは手を止め、あきれた顔でヨウォンを見た。

「お前、そんなことしてたら彼女に逃げられるぞ？」

「なんで？」

「なんでって……。女を待たせたらロクなことにならないんだぜ！？」

本当にわからない、という顔のヨウォンに、ジホは大きくため息をついて見せた。

「いっそのこと、婚約式なんてすっ飛ばして、結婚しちゃったらどうだ？」

その問いに、ヨウォンは余裕を感じさせる真顔で答えた。

「ソニは俺の仕事をちゃんと理解してくれてるよ」

ジホは洗いあがった両腕をかかげ、もう一度ため息をついた。

「その自信、どこから湧いてくるんだろうな。まったく。うらやましいよ」

「そうか？ お前の彼女は違うのか？」

「この間紹介した子ならフラれたよ。 って、俺の話はいいんだよっ！」

「なんだ、またかよ。お前もお見合いしてみたらどうだ？ 案外いいと思うけどな」

言いながらヨウォンも両腕をかかげ、手術室のドアの前に立ってスイッチを脚で押した。

「じゃあ、行こうか」

ドアが開いたが、ヨウォンは手を上げたまま動かない。

「どうした？」

「でも、婚約式は飛ばしちゃうっての、いいかもな」

「どっちでもいいよ、もう！ 好きにしてくれ！」

後ろからジホがヨウォンのかかとをつつき、ようやく二人は手術室へ入っていった。

同時刻、仁寺洞(インサドン)の小さな美容室。

頭のとっぺんで髪をおだんごにまとめた美人がソニの長い髪をあれこれいじっている。

「ミュン、ほんとにゴメンね。今日、お店お休みにしてもらったのに」

ソニの髪を指に挟んだまま、イ・ミュンは鏡越しにソニを見つめた。

不満を抱えたまま、言えないことがストレスだというような表情をしている。

「キャンセルはまあ、いいんだけどさ。 ヨウォンさんの態度がさ・・・
納得いかないってゆうか、ちょっと身勝手っていうか・・・」

「え？」

「結婚に対してさ、どうも軽く考えてるみたいに思えるんだよね」

「そんなことないよ？」

「そうかなあー」

ミュンはうまく言えないもどかしさから、口をとがらせたまま黙った。

そんな様子に苦笑して、ソニはバッグから写真を取り出した。

「ほら、ミュン、この間言ってたコの写真、持って来たよ」

「わあ！ トレッキングに来たイケメン中学生！？ やだカワイイ！ 背え高いねえ！
・・・あれ？ 何？ この写真！？」

ハイテンションで「かわいい」を連発していたミュンが、ふと写真を入れ替える手を止めた。

ミュンが差し出したのは、街を歩き交う人々の写真だった。

「ああ、これ？」

「何？ 知らない人ばかりだけど？」

覗き込んだミュンに見せるようにして、ソニは小さな背中を指差した。

「ほら。 わかる？ これ、ヨウォンオッパ」

「は！？」

眉間にしわを寄せて息を止め、目を細めて写真を見つめるミュン。

3秒後、ぷふーっと息を吐きながら両手を振った。

「わっかんないよ！ ソニにはわかるの？」

「もちろん！ どんなに小さくても、オッパのことはすぐに見つけられるわ」

ソニは写真を見ながら、しみじみと言った。

「私たち、きっかけがお見合いでしょ。 だから、恋人の時間が増えるのはうれしいわ」

「でも、ソニってば・・・、いつも待ってばっかじゃん」

ミュンはまた口をとがらせる。

「患者さん優先なのは、最初から言われてたのよ。 お見合いの時に宣言されてたから」

「ええ～！？」

「だから、この写真をいつも持ってることにしたの」

「はあ？」

ソニは写真を自分の胸にあて、目を閉じた。

「この背中を見つめているのが私の運命、 私の人生だってことを忘れないように」

「なにそれ・・・」

ミュンはますます口をとがらせた。

2日後の23時。ソニの部屋のチャイムが鳴った。



ドアののぞき穴から確認すると、ヨウォンがうつむいて立っていた。
ソニはあわててドアを開けた。

「オッパ!？ どうしたの？ こんな時間に」

「・・・入っていい？」

ヨウォンは部屋に上がると、ふたり掛けのソファに腰を下ろした。
ひざの上に腕を置き、組んだ手に頭を乗せるようにうづくまる。

「コーヒー、淹れるね」

「ソニ、ここに・・・」

ヨウォンはうつむいたまま、自分の左側のスペースに手を置いた。
コーヒーケトルを置き、ソニは黙ってヨウォンの隣に座った。

しばらく、ヨウォンはそのまま座っていた。
時折、組んだ指に力が入り、小刻みに震えていた。
きつく目を閉じた横顔には苦しみと怒りが読み取れる。
ソニが隣に座っていても、どこか拒絶感があった。

ゆっくり深呼吸をすると、ヨウォンはようやく顔を上げた。
それでもまだ眉を寄せ、ソニを見ようとはしない。
体をソファに預け、指は組んだまま、頭をたれてまた目を閉じた。

少しだけ、ヨウォンの頭が傾く。
そして、ためらいがちにソニの肩に寄りかかった。

ヨウォンの髪から煙草の匂いがした。
普段、ほとんど吸わないヨウォンが、髪に匂いが移るほど吸ったのだろう。

患者さんが亡くなったのね・・・

ソニはヨウォンの髪にほおずりした。

慰めの言葉は役に立たない。
一番必要なのは時間。
ソニはじっと動かず、肩から伝わるヨウォンの哀しみを感じていた。
結婚して、二人で暮らすようになれば、こういう日は恐らく何度も訪れるだろう。

どんな時もこうして寄り添って、支えていくから・・・

ソニはそっとうなづいた。

掛け時計の針が時を刻む音。
窓の外から聞こえてくるサイレン。
ヨウォンの規則正しい呼吸。
ソニの鼓動のほうはやや速かった。

手術室

チャン・ジホが満足そうに縫合完了を告げる

ICUで様子を見ているヨウォン

患者はまだ目を覚まさない

少し遅いんじゃないか？

いぶかしげな顔で腕を組み、くちびるを軽く噛む

あわただしい病室

看護師が心停止と叫ぶ

チャージの掛け声

まっすぐな線が続く計器

ヨウォンが再度心臓マッサージを試みる

非常階段

壁に何度も拳を打ち付けるヨウォン

助けられたのに！ 生きていられたのに！

もう少し俺が気をつけていたら！

やがて壁に頭を押し付け、肩を震わせながらしゃがみこんだ

いつの間にか、ヨウォンはぐっすり眠っていた。

ソニはゆっくりと体をひねり、ヨウォンをソファに寝かせた。

客用の毛布をかけ、床に座ってヨウォンに寄り添う。

まだ眉間にしわを作ってる・・・

オッパ、もう大丈夫よ ゆっくり眠って・・・

ソニはそっとヨウォンの髪をなでた。

ゆっくりと、手のひらのぬくもりを伝える。

ヨウォンの眉間から、少しずつ力が抜けていった。

「当直の引継ぎは終わったか？」

東病棟4階のナースステーション。

カウンターにもたれたチャン・ジホがヨウォンに自販機のホットコーヒーを差し出した。

日曜日の夜。

緊急外来も無く、院内は静かだった。



「ああ、イ・スホさんの容態も安定しているから、問題なさそうだな」

「このまま無事に過ぎてくれればいいな」

「そう願うよ」

ヨウォンがコーヒーに口をつけた時、ポケベルが鳴った。

二人は同時に白衣のポケットに手を突っ込んだ。

「俺のだ」

番号が表示されたのはヨウォンのポケベルだった。

「え？ 産科のアン先生から？ 妊婦の急患かな？」

「そりゃ大変だ、急げ！」

走り出したジホが角から飛び出してきた看護師とぶつかった。

「おおい、気をつけろ!？」

「あいたた! すず、すみません! あ、キム・ヨウォン先生! 良かった!!」

ジホが差し出した手を頼りに立ち上がりながら、看護師がたずねた。

「パク・ソニさんって、キム先生の彼女さんですよね!？」

「え?」

「大変なんですよ! すぐ来て下さい!!」

休憩室のテレビがトレッキング同好会遭難のニュースを繰り返し流していた。
画面にソニの名前が映し出された。行方不明者の一人として。

「遭難!？」

ヨウォンの心臓が鼓動を早める。

現地であわただしく行き来する人々や警察官、レスキュー隊員たち。

行方不明者の家族が自宅前でインタビューを受けている。

ヨウォンにはそれが遠いどこかの国のことのように思えた。

「霧が出て、道に迷ったんじゃないかって言っていました」

呼びに来た看護師がおずおずと説明を加える。

ヨウォンはハッと何かを思い出し、携帯電話を取り出した。

誤ってボタンを押したのか、いつの間にかマナーモードになっている。

ソニの両親からの着信履歴と、ソニからのメールが2通届いていた。

おはよう! トレッキング同好会の皆さんと行ってきます

18時半には帰る予定です^^

ソニ

約束の時間から1時間以上経っていた。

「行かなくていいのかよ？」

チャン・ジホは居心地の悪そうな様子でヨウォンの後ろをついて歩いた。
聞こえていないのか、ヨウォンは無言で計器類をチェックし、患者の様子を見て回る。
ジホがもう一度聞くと、ようやく振り向いた。

「今晚は当直だ」

「・・・ 彼女、きっと待ってるぞ？」

「俺が助けに行くのか？」

「いや、そうじゃなくて・・・ あっ、そのチューブは外したらダメだ！」

「え？ ああ、すまん。こっちか」

別の点滴バッグに手を伸ばそうとして、ヨウォンはたたらを踏んだ。

ガシャン！

大きな音を立てて、処置用の器具やトレーが床に散らばった。
遠くにいる看護師までが振り返った。

「すみません！ ああ・・・ いや・・・ ちょっと・・・ ジホ、後頼む！」

点滴バッグをジホに押し付け、ヨウォンは早足で病室を出た。

病院の屋上。

煙草に火をつけようとしても、すぐに横から風がさらっていく。
何度か試すがうまくいかず、ヨウォンは煙草を投げつけた。

「くそっ！」

ベンチに座っても落ち着かない。
携帯を取り出し、ソニの番号を押した。

電源が入っていないか、電波の届かないところに・・・

携帯を閉じ、手に余るような様子でもてあそぶ。
両膝に腕を置き、だらんとうなだれた。
パッと顔を上げ、口元に手をやったかと思えば顔を覆う。

深く、長いため息。

目を閉じ、天をあおいだ。

急に立ち上がってうろうろと歩き回る。
立ち止まると携帯を取り出し、2通目のメールを開いた。

オッパ、頂上についたよ
雲の上は別世界！
どんなことがあったって、この風景を見たら気持ちをクリアできるよ！
いつか、一緒に見たいな
ソニ

ソニの笑顔が浮かぶ。
特に美人というわけではないが、清楚でかわいらしい笑顔。
控え目で、デートより仕事を優先しても、拗ねたりすることもない。
やさしくて暖かい手でヨウオンの髪をなでるソニ。

風がそんなソニの姿をかき消す。
もう一度、指が覚えている番号を押した。

電源が入っていないか、電波の届かないところに・・・

ヨウオンは携帯を握り締め、転落防止の金網にすがりついた。

「ソニ・・・ どこにいる？ 電話してこいよ・・・」

ソウルの夜景は美しすぎて、今起きていることが夢のようだった。

カツン、とコンクリートの床を打つ硬い音がした。

「自分から行けばいいじゃない！ 電話なんか待ってないで！」

背後から、責めるような口調で声がかかった。

ヨウォンが振り向くと、おだんご頭のイ・ミュンが腕組みをして立っていた。

「本当はソニのことなんて、どうでもいいんじゃないの？」

「ミュンさん！？」

コツコツとヒールの音を響かせ、ミュンはヨウォンの前に立った。

「ソニがいてもいなくても、何も変わらないんじゃないの？」

「何を言って・・・！？」

「ソニはいつも待ってばかり。あなたを追いかけて、あなたの背中ばかり見てる」

ミュンが強い視線でヨウォンを見た。

「でも、あなたはどうか？ 後ろにソニがいること、忘れてない？」

「結婚するつもりなんだ、そんな訳ないでしょう！？」

「そうかしら！？ ならどうしてまだここにいるの？」

ヨウォンも流石にムツとして口調が荒くなる。

「仕事があるんだ！ 人の命を預かる以上、無責任なことにはできません！」

「じゃあ、ソニの命はどうなの？ 恋人の命は人任せにするの！？」

「俺が行けば見つかるっていうんなら、どこへでも行くさ！！」

ヨウォンの激しい反論に、ミュンは思わず口ごもった。

「山から降りた時、ソニは最初にあなたを探すわ」

胸がずきんと痛み、ヨウォンはミュンから視線をそらした。

「行ってこいよ」

声の主はチャン・ジホだった。

白衣のポケットに両手をつっこんで立っている。

「カン先生に代打を頼んどいた。あと5分くらいで着くから」

「ジホ！」

「ほおっておくと、女は逃げるぞ!？」

親指を立ててニッと笑うジホに、ヨウォンは感謝の笑顔を返した。



真夜中の高速道路。

ダークブルーのK7は闇に溶け込み、ライトだけが滑るように走る。

左ひじを窓のへりにかけ、右手だけでハンドルを操るヨウォン。

気を紛らすように前髪をかきあげ、くちびるを噛む。

繰り返されるため息と深呼吸。

ラジオのスイッチをオンにする。

市街地をとうに離れ、FMの電波も届かない。

スイッチを切ると、無音の車内にエンジン音がいつもより大きく響いた。

高速道路を離れ、街路灯の数もまばらになった。

無言の二人。

ミヨンは助手席で脚を組み、じっと前方の闇を見つめている。

ソウルを出てしばらくは、ミヨンがソニとのエピソードを披露してくれた。

落ち着いているように見えて、案外おっちょこちょいなところがあったり

お客の希望する、ちょうどいい色にヘアカラーを調合できることなど

ヨウォンが知らないソニの様子を聞くのは楽しかった。

しかし、ひとつのエピソードを語り終えると、ミヨンは涙ぐんで無言になった。

しばらくしてまた、思い出したように話し始めるが、やはり最後は涙声になった。

ライトが照らし出す限られた風景はさっきから少しも変わらない。

真っ暗な世界をどこへ向かっているのか、時折分からなくなる。

ヨウォンは自分の不安がそこに映し出されているような気がした。

お見合いの日、写真よりかわいいな、と思った。

どこか懐かしさを感じる、暖かいイメージだったから付き合う気になった。

映画館まで歩く間、歩幅が合わなくて、何度も振り返ってソニを待った。

はずかしそうに駆けて来るソニの姿が浮かんで、ヨウォンは微笑んだ。

プロ用のハサミを手に、鏡の中のソニが笑う

ヨウォンの濡れた髪を少しすくっては、真剣な表情でハサミを入れる

リズムカルな心地良い音

やりきれない思いでソニの部屋を訪ねた日。

あの時、ソファで感じたソニの鼓動が重なった。

ソニは何も聞かず、何も言わず、ただ、ヨウォンを受け入れてくれた。

心から安心して、無防備に身を預けることができた。

だから、一生一緒にいたいと思った。

目的地を示す標識が目に入った。

その一瞬以外、ただ真っ暗な闇があった。

夜明け前。

K7は現場に到着した。

混雑する駐車場。

ヨウォンとミュンは捜索隊の本部が置かれている登山口まで無言で歩いた。

吐く息が白い。

知らず知らず、厳しい表情になる。

「ヨウォンさん、ソニのご両親があちらに」

ミュンが指し示す先に、険しい顔で立つソニの父親がいた

背筋を伸ばし、中学校の校長らしい威厳が感じられる。

隣で今にも倒れてしまいそうな母親の肩をしっかりと抱き、支えていた。

母親がヨウォンとミュンに気づいた。

「ああ、ヨウォンさん！ ありがとう、来て下さって！！」

父親は険しい表情が少しだけ和らいだ。

「病院は大丈夫なのか？ 当直だと言っていたらう？」

「はい。同僚が勤務を代わってくれましたので」

「そうか。なら良かった。患者さんに何かあっては困るからな」

二人はソニの両親から現在の状況を聞いた。

同好会の代表者が救助を求めて先に下山し、今は山中で捜索隊と合流して、

ふもとに向かっているところとのことだった。

話しているうちに、捜索隊がざわざわと騒がしくなった。

「先行した二人が到着しました！」

戻ってきたのは30代の男性と、背の高い若者の二人だった。

ヨウォンはその若者の顔に見覚えがあった。

ソニとピースして写真に納まっていた中学生だった。

人ごみを掻き分け彼の前に立つと、ヨウォンはいきなり彼の胸ぐらをつかんだ。

「お前、ソニを置いてきたのか！？」

「えっ！？」

「ヨウォンさん！？」

慌ててミュンと周りの人々がヨウォンを静止する。

一緒に下山したもうひとりの男性が中学生をかばって割って入り、頭を下げた。

「ご心配をおかけして申し訳ありません！！」

男性はかなり疲れた顔で、服のあちこちに泥や木の葉がついている。

「年配の方が足をくじいてしまいまして、移動は無理だと判断しました！

5人は沢浴いに避難してもらってます！

僕ひとりでは何かあった時に困るので、若い彼と一緒に来てもらったんです！

僕が捜索隊を案内しますので、もうしばらくだけ待って下さい！！

お願いします！！」

男性は何度も頭を下げた。

地面に手をつき、額をこすりつけて謝り続けた。

レスキュー隊員が涙を流す男性を抱き起こし、捜索隊本部へ連れて行った。

ヨウォンも他の家族達も、何も言えなかった。

大きな岩の間をぬいながら流れていく清流。
薄いシートを枝にくくりつけただけの雨よけ。
その下で5人の老若男女が肩を寄せ合っている。

「どうぞ」

ソニがビスケットを割り、それぞれに渡した。
全員、それが最後の食料だと分かっていたので、少し躊躇しながら口に運んだ。

怪我をした年配の女性が目を閉じ、隣の男性にもたれかかった。
男性が慌てて女性の肩をつかんでゆすった。

「おい、寝るな！ 起きなさい！」

頬を何度か軽く叩き、無理やり目を開けさせる。
もうひとりの中年女性も声をかけた。

「眠ってはだめですよ！ しっかり！」

分かっただけでも、ソニのまぶたも重たくて仕方がなかった。

ソニ・・・

優しい声が呼ぶ
心地よい、響く声

オッパ・・・

ヨウォンの笑顔がだんだんぼやける

オッパ・・・？

手を伸ばすが、その手すら見えない

暗闇の中、ソニは方向感覚を失い、どこまでも落下していった

「大丈夫ですか！？ しっかり！」

ソニの肩を揺らす手。

がくん、と無重力から戻る。

いつの間にか眠っていたことにハッとする。

目の前にレスキュー隊員のユニフォームがあった。

周りを見る余裕もなく、ソニはその腕の中に倒れこんだ。



午前10時過ぎ。

全員発見の第一報がテレビの速報に流れた。

ヘリコプターで遭難者が吊り上げられ、ふたりずつ運ばれてきた。

ヨウオンはソニを待ちながら、先に運ばれてきた遭難者達の診察と世話を手伝った。

ソニは最後に運ばれてきた。

レスキュー隊員に背負われたソニを見た時、ヨウオンは血の引く音を聞いた気がした。

疲れきって真っ青な顔。

紫色のくちびる。

駆け寄り、ソニをそっとストレッチャーに横たわらせる。

初めて見るソニの様子に動揺を隠し切れなかった。

ソニの右手首で脈を診て、聴診器を当て、簡単な診察をする。

外傷は無い。

恐らく疲れとストレスで体力が消耗しているのだろう。

自分で確認したことで、ヨウォンはようやくほっと息をついた。

毛布をかけられ、救急車を待つソニに、両親とミュンが駆け寄り声をかけた。

うっすらと目を開けたソニが3人を見てほほえんだ。

「ああ、ソニ！ 無事で良かったわ！」

「ごめんね母さん、心配かけて・・・」

「ソニ、大丈夫か？ 痛いところは無いか？」

「父さん、ううん・・・大丈夫」

「ソニ～！！ ほんと良かったよ～！ 心配したんだからね～！」

「ミュン！？ ごめんね、ごめん・・・」

3人の後ろに立つヨウォンの姿が目に入った。

「オッパ・・・！？」

ミュンがヨウォンに場所を譲る。

ヨウォンは一歩進むたびにこみあげてくるものをこらえ、ハの字の眉毛で笑顔を作った。

「おかえり・・・ソニ・・・！」

ソニの目から大粒の涙がぽろぽろこぼれた。

「オッパ・・・、待っててくれたのね・・・？」

ヨウォンはわざと歯を見せて笑った。



翌日。

病室のベッドで眠っているソニ。

点滴液は残り3分の1ほど。

極限状態で夜を過ごしたことで、ソニはかなり消耗していた。

地元の病院で検査を受けた後、ヨウォンの病院へ移送される間も眠り続けた。

「今はとにかくぐっすり眠るんだ
明日はきっと元気なソニになれるから」

ヨウォンはその寝顔にささやいた。

そこにチャン・ジホがひょっこり顔を出した。

「お？ ご両親は帰られたんだ？」
「ああ、近くのホテルにもう一泊されるそうだ」

ヨウォンは入り口のドアにもたれてジホと向かい合い、腕を組んだ。

気が緩んだのか、安心した表情でふうとため息をついた。

「お前もだよ。キム・ヨウォン。ちょっと休んだらどうだ？」
「ん、もう少しいるよ。ソニが目覚ますかもしれないし」
「そうか。わかった。今日も休みにしといたから、ゆっくりしろ」
「ありがとう。気が利くな」
「だろ？ はは」

ジホは親指を立てて笑顔を見せると、仕事に戻っていった。

チャン・ジホを見送り、ソニのベッドサイドに戻るヨウォン。
ソニの髪をなで、静かな寝顔に微笑みかける。

急に、サイドテーブルに置かれた小さなトートバッグから振動音がした。
ソニの携帯電話が光っているのが見える。
取り出してみると、イ・ミュンからのメールだった。
中身は見ずにバッグへ戻す。
代わりに、その時手に触れたデジカメを取り出した。
ヨウォンが何気なくボタンを押すと、バックモニタに写真が表示された。

「ああ、・・・これ、今回の・・・」

三角のボタンを押すと、遭難前の楽しげな様子が映し出された。
笑顔のソニ。
後ろから覗き込んでいる白髪の男性やふくよかなアジュンマ。
みんな楽しそうな笑顔をしていた。
つられてヨウォンも笑顔になる。
何枚目かで、ふいっと画像が途切れた。

この後、霧が出て道に迷ったんだな
どんなに心細かっただろう
俺も一緒に行けば良かった・・・

ヨウォンは逆向きのボタンを押した。
押すたびに時間が遡っていく。
出発直前らしい登山道の入り口で全員がピースをしている。
チェックのシャツで帽子をかぶったソニと、背の高い中学生。
山頂でお昼を食べている仲間達の笑顔。

いつの間にか、前回のトレッキングの写真にまで遡っていた。
何度かボタンを押し、もう一度今回の写真へ戻る。
そこでヨウォンは何かひっかかりを感じ、また時間を遡った。

1枚だけ、街を写した写真があった。
見知らぬ人ばかりの写真。

なんでこんな写真・・・？

このビル・・・ 清溪川 (チョンゲチョン)沿いかな・・・

ヨウオンの脳裏にある日の記憶が蘇った。

振り向いた時、そこにソニはいなかった。
来た道に戻ると、ソニは立ち止まってデジカメを覗いていた。

もう一度写真を見た時、ヨウオンはその中に見覚えのある色を見つけた。
目を凝らしてじっと見つめると、グレーのジャケットを着た小さな背中だった。

「これ、俺？」

ソニがシャッターを押した時、自分はこんなに離れたところにいた。
一人ですたすたと歩いていく自分の背中をソニはどんな気持ちで見っていたのだろう。
きゅう、と胸がしめつけられ、切ない感情が湧き上がった。

カメラをサイドテーブルに置き、ヨウオンはソニの左手に自分の左手を重ねた。

温かい手。

両手でソニの手を包み込み目を閉じると、ぬくもりが両手を通して体中に染み渡った。
ヨウオンはソニの手に何か物足りなさを感じ、目を開けた。

ああ、指輪もまだだったな
婚約式、延期しちゃったから

ソニはまだ眠っている。
ヨウオンはそっとつぶやいた。

「待たせてばかりで、ゴメンな」

「パク・ソニさん、おはようございます。ご気分はいかがですか？」

「もう大丈夫です。ありがとうございます」

回診に来た担当医が声をかけ、ソニの脈を診る。

ソニの頬には赤味が戻り、ほぼいつものソニだった。

「だから、大丈夫だって言っただろう？」

ベッドの反対側に、腕組みをして眉を寄せたヨウォンが立っている。

担当医は苦笑しながらソニの目やのどを診察した。

「必要以上に触るなよ！？」

本気で睨むヨウォンに、担当医は笑いをこらえきれず顔を背けた。

看護師もくすくす笑っている。

「オッパ・・・」

ソニはどんな顔をしたらいいかわからず、恥ずかしそうに笑った。

病室のドアが閉まると、その向こうで大笑いする声が聞こえた。

ヨウォンは気にもかけず、ソニの掛け布団を直す。

ソニはヨウォンの顔をまじまじと見つめた。

「何？」

「ううん。なんでもない。・・・あ・・・」

「ん？」

「お仕事、大丈夫？」

「ああ、今日は午後からだから。まだ時間あるよ」

「じゃあ、散歩に行きたい！ オッパ、連れてって！？」

「散歩！？」

ヨウォンがわくわくしているソニの願いを断れる訳がなかった。



屋上をゆっくりと進む車椅子のソニと、それを押すヨウォン。
病院は小高い丘に建っているの、けっこう遠くまで見渡せる。

「あ————— 気持ちいい—————」

ソニは手を精一杯広げると、大きく深呼吸をした。
ヨウォンはその仕草がかわいくて苦笑した。

「山で遭難したばかりなのに、ソニは高いところが好きなんだな」
「ふふ・・・ こうやって景色を眺めると、世界は広いな—って思えるでしょ！？
自分の悩み事なんてちっぽけだと思えるじゃない！？」
「ソニにも悩み事なんてあるの？」

ヨウォンは茶化したが、ソニは真顔で答えた。

「そりゃ、あるわよ。オッパのこととか・・・」

そう言うと、ふいと顔を背けた。
ヨウォンの胸がズキンと痛んだ。

「な、何？ 俺が原因？」

ヨウオンは車椅子の前に回り込み、しゃがんでソニの顔を覗き込んだ。
真剣な表情のヨウオンを見て、ソニは少し意外だという顔をした。

「そうよ。私の気持ちをかき乱してばかりなんだから・・・」

ソニの目がみるみる潤む。

「ソニ!？」

ソニはじっとヨウオンの目を見つめていた。

「オッパがどう思ってるか、いつも不安だった」

「え？」

「お見合いで私のこと気に入ってくれて、本当にうれしかったの。

だけど、オッパの本心はどうなのか、分からなくて。

このコでいいやって、思われてるのかな? って・・・」

「何言ってるんだよ。そんな訳・・・」

ソニは視線を外し、目を伏せた。

「信じたかった。

私のこと、好きになってくれたって」

ヨウオンはソニの言葉に驚いて言葉が出なかった。

「お仕事優先なのはちゃんと納得してる。

それはいいの。

オッパの性格も分かってる。

それでも・・・

時々わからなくなるの。

オッパの気持ちが・・・

不安になるの・・・」

「ソニ・・・」

涙を溜めたまま、ソニが笑顔で振り返った。

「だからね、嬉しかったの！

山から下りてきた時、オッパがいてくれて！！」

ヨウォンの脳裏にあの日のソニがよみがえり、胸に痛みが走った。

「ありがとう、オッパ」

愛しさがあふれんばかりのソニの笑顔。

その頬を涙がつたって落ちた。

ヨウォンは何も言えず、ただ、ソニをぎゅっと抱きしめた。

もう一度、ソニの頬に涙がこぼれた。

抱きしめる手をゆるめると、ヨウォンはソニの額に自分の額をくっつけ、微笑んだ。

「ソニ、目がまっかだ」

「オッパのせいでしょ！？」

「ごめん」

「ふふっ」

二人はそのままくすくすと笑った。

ヨウォンは立ち上がり、ペットボトルの水でハンカチをしめらせると、それをソニに差し出した。

「これで冷やしな。泣きすぎで目が腫れちゃうから」

そう言った瞬間、ヨウォンはデジャビュに襲われた。

いつだったか、こんなことがあった気がした。

濡れたハンカチを受け取ったソニが懐かしそうに言った。

「高校の時も、こうやってハンカチ貸してくれたよね」

「え！？」

廊下の手洗い場

蛇口を閉める手

非常階段の踊り場

座って泣いているのは高校生のソニ

ぬぐってもぬぐっても、大粒の涙が制服のスカートを濡らす

「っ・・・ うく・・・ ミュンこそ・・・んっ・・・誤解なのに・・・バカ・・・」

しゃくりあげながらも文句をこぼしている

「その辺にしといたら？ 目が腫れちゃうよ!？」

背後から声をかけられ、ソニは驚いて飛び上がった

ふり仰ぐと、男子生徒がハンカチを差し出している

逆光で顔が良くわからない

もう一度ハンカチを差し出され、ソニは反射的に受け取った

それは水で濡れて、ひんやりしていた

彼はソニの横を通り過ぎ、1段、2段とゆっくり降りていく

それはソニがあこがれている横顔だった

「あのっ、キム・ヨウォン先輩!？」

歩を止めてふり返ると、彼は少し驚き、照れくさそうに微笑んだ

「あっ、ありがとうございますっ!」

「・・・友達と仲直りしろよ!？」

ハンカチを握り締め、ソニは「ハイ」と答えるのが精一杯だった

風に乱れた髪をかきあげ、ヨウォンは驚いた顔で笑った。

「俺たち、高校で会ってたの？」

「ふふっ・・・ オッパ、やっぱり覚えてなかった」

「あ、ごめん・・・！」

「いいのよ。当然だもの。キム・ヨウォン先輩」

ソニは小首をかしげ、いたずらっぽくはにかむ。

ヨウォンはその時のソニを思い出せないのがもどかしかった。

「だから・・・、お見合いの話が来た時の私の気持ち、わかる！？」

ふふっと笑うソニ。

とうとう秘密を打ち明けてしまった、という照れくささから、ふいっと目をそらす。

少し居心地が悪そうで、でもそれがまた楽しい。

ヨウォンの反応をうかがうように、目を丸くして覗き込むようなポーズをとる。

そんなソニを見て、ヨウォンは愛しさで胸がいっぱいになった。

「ズルいな、ソニ・・・」

「え？」

「俺が知らないうちに、そんなに先に行ってたなんて」

「ふふ・・・いつもと逆ね」

「そうだよ、俺、置いてきぼりじゃないか」

冗談でごまかさなければ、今の気持ちをどう言ったらいいかわからなかった。

「そうか・・・ そんな前から・・・

ずっと前から・・・

いや・・・ きっと、生まれた時から始まってたんだな

俺たち・・・」

ヨウォンはソニの前にひざまづくと、その両手を取った。

真顔のヨウォンにソニは少し戸惑い、どぎまぎした。

「ソニ・・・ 愛してる・・・

これからずっと、ふたりで歩いていこう・・・」

そして、ソニの左手のくすり指に、やさしいキスをした。

ソニは瞳をうるませ、極上の笑顔を見せた。

「世界一、素敵な指輪ね」

END



ようやくあとがきにたどりつきました

「接吻（くちづけ）の指輪」の限定版にはミュージックビデオが収録されていて、

イ・ビョンホンさんの相手役は木村多江さんでした

哀しいストーリーだったので、歌詞とミスマッチなのがどうにもむずがゆく

しあわせなカップルのお話を書きたくなくてできたのがこの物語です

恋愛メインのお話は初めてなのですが、いかがだったでしょうか！？

幸せな気持ちで読み終えていただけたなら、幸いです

ヨウォンはもちろんイ・ビョンホンさんがモデルです

白衣で救急外来に手際よく対処する、なんて映画かドラマを見たいものです♪

ソニにモデルはいないんですが、身長は157センチくらいです

って、それは私の身長（笑） まあ、ちいさいイメージってことです

ちなみに、ヨウォンの友達のジホは宮川大輔さん（メガネあり）です^^

曲を聞いたことがないという方は、ぜひUSENでリクエストして下さいね

「いつか」というCDのカップリング曲なので、よろしければレンタルして下さい

もちろん、1枚お買い上げいただければ、これまた幸いです♪

最後に

更新中もその都度アクセスして下さい、PDFをダウンロードして下さいみなさま

どうもありがとうございました。大変励みになりました